

A.B. Smith 博士のご逝去を悼んで

東京工業大学

千葉 敏

chiba.satoshi@nr.titech.ac.jp

2012年1月5日に、米国アルゴンヌ国立研究所で長らく核データの測定に携わって来られた Alan Bowen Smith 博士がお亡くなりになりました。ここに深い哀悼の意を表します。

私と Smith 博士の縁は、私が旧日本原子力研究所から日米核物理協定に基づいてアルゴンヌ国立研究所 (ANL) を訪れた 1989 年に遡ります。学生時代から中性子核データ、特に中性子散乱断面積の測定に携わってきた私は、ANL のグループが書く論文や、所内レポートである ANL/NDM シリーズをたくさん読んで、それによって核データ研究の最前線を学んできました。Smith 博士は ANL の高速中性子発生装置 (FNG) グループを率いるリーダーとして世界の核データコミュニティーのリーダー的存在でしたから、Smith 博士のグループに滞在する機会を得たときは天にも昇る気持ちでした。

当時、Smith 博士のグループでは実験家として D.L. Smith 博士、P. T. Guenther 博士、J. Meadows 博士が活躍しており、理論家として R.D. Lawson 博士 (原子核の殻模型の大家) が所属していました。この他、技官として 3 名の方がいて実験の手伝いや加速器、計算機の保守などにあたっておられ、今では少なくなってしまう中性子核データをテーマとする研究グループを形成していました。GMA で有名な Poenitz 博士は少し前にアイダホに移籍してしまったようで、私の滞在中にお目にかかる機会はありませんでした。また、パーティーの時などには Whalen 博士が参加することがありました。FNG での研究は中性子弾性散乱断面積の精密測定と光学模型解析が有名ですが、当時は分散関係を用いて束縛状態のポテンシャルを求めて、それと一粒子 (殻模型) 軌道との関係の議論が流行っていて、私もたくさんの論文にすることができました。また、相関の強いデータに対する最小二乗平均値が全てのデータより小さくなってしまおうという "Peelle's Pertinent Puzzle" の問題を D.L. Smith さんといっしょに考えて GMA を改良したりして、1 年半のと

でも楽しい時を過ごすことができました。一連の測定装置は古い物でしたが見事に特化・組織されており、アメリカが全盛期だった良い時代が受け継がれていました。

Smith 博士はいつもパイプを口に咥えたまま話す姿が有名で、そのために発音が大変聞き取りにくく、また一見強面に見え、さらには核データ界の大御所ですから、国際会議などでしか会わないと『何を言っているかわからない怖い人』に見えますが、実際は全然別で、大変面倒見のいいおじいちゃんという感じでした。私が滞在した当時で 60 近くだったと思いますから、つい最近まで精力的にデータ解析をやってこられたことは驚異的です。私有家内と ANL に赴任すると、ご自分の車でわざわざ空港まで出迎えてくれて、また近所を走り回ってアパート探しや家具探しを手伝ってくれました。大先生なのにと、思って大変恐縮したものでした。私たちの最初の子供があちらで生まれた時も真っ先にお祝いに来ていただいて、『一ヶ月もすればこの子は夜通し寝るようになるよ』とアドバイスしてくれたのは、夜泣きで悩まされていた私たちには福音の言葉に思えました。そして、実際その通りになりました。



写真:我が家の長女出産のお祝いに駆けつけてくれた Smith 博士(右から 2 番目)ご一家。
左端は長男の David 君、その隣がバーバラ婦人

Smith 博士が研究にかける情熱はとて私には真似できない鬼気迫るものがありました。まさに全生命力をかけていたという感じでした。研究そのものが好きだったという

こともあるでしょうが、時折 Guenther (ガンサー) さんから聞く Smith 博士の若いときの経験、ヨーロッパ戦線に従軍して九死に一生を得たことも加わっているのではないかと思います。ガンサーさん自体がドイツ出身でとても強烈な経験の持ち主です。この他にも、FNG の技官の方の一人はリトアニア出身で、ナチスの迫害から母親と二人で着の身着のまま地中海まで逃げてアメリカに渡ってきたのだということを知りました。日本でも同世代の方々は同様な体験をお持ちかもしれませんが、このような強烈な経験をしてきた Smith 博士だからこそ、生きていることの意味を噛みしめ、あれだけの情熱をもって研究に没頭できたのだらうなと思います。実際、この人たちはとても“濃く”生きていました。Smith 博士の口から直接そのような体験や考えを聞いたことはありませんが、Smith 博士の生き様を通して、私も平和のありがたさ、その中で研究を行えることの幸せをより強く実感することができました。やはり、私が学生時代から思っていたとおり、Smith 博士は自分にとってのヒーローです。このような人を同じ分野に持てたことは大変幸運なことだと思っています。翻って、自分たちは若い人たちの目標になっているだろうか？ということ、我々はいつも考えないといけなないと思います。

1月にD.L. Smith博士からの電子メールでA.B. Smith博士のご逝去を知り、何とか奥さんのバーバラさんに連絡をとろうと思っていたところ、3月になってご本人から手紙が届きました。勝手ながらそれを以下に紹介させていただきます。最後の何ヶ月かは体調が悪く苦しんだようですが、今は穏やかに眠っておられることを願いつつ、A.B. Smith博士のご冥福を心からお祈り申し上げる次第です。

11 March 2012

Dear Satoshi,

Sadly, Alan passed away January 5th, after many months of failing health.

Alan was very fond of you and Taeko, and often mentioned you.

Love and best wishes to you and Taeko and your daughters,

Barbara